夕日岩屋・朝日岩屋
名勝調査報告書

豊後高田市教育委員会

例　　言

１、本調査報告書は、夕日岩屋・朝日岩屋の意見具申に伴い作成した。

２、国登録記念物（名勝地関係）への意見具申に伴い、名称を「夕日岩屋」「朝日岩屋」とする。

３、夕日岩屋・朝日岩屋について、平澤毅氏（文化庁文化財第二課）、山路康弘氏（元大分県教育庁文化課）にご指導、ご助言をいただいた。

４、本調査報告書の編集は豊後高田市教育委員会文化財室の松本卓也が担当した。

５、本調査報告書に使用した現況写真は、豊後高田市・豊後高田市教育委員会が撮影したものを使用した。また、航空写真については豊後高田市のＧＩＳに使用された写真を、ドローンを使った写真については、平成 29 年度田染耶馬名勝調査事業で撮影したドローン映像からスクリーンショットで切り出した。
表紙写真は、地域活力創造課の友久亮が撮影した。

目　　次

第１章　夕日岩屋・朝日岩屋と周辺の環境
第１節　自然的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
第３節　社会的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
第４節　これまでの研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８

第２章　夕日岩屋の内容と価値
第１節　夕日岩屋の風致景観に対する評価の歴史的変遷・・・・・９
第２節　夕日岩屋の構成要素及び周辺の要素・・・・・・・・・・・10
第３節　夕日岩屋の価値・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第３章　朝日岩屋の内容と価値
第１節　朝日岩屋の風致景観に対する評価の歴史的変遷・・・・・14
第２節　朝日岩屋の構成要素及び周辺の要素・・・・・・・・・・・15
第３節　朝日岩屋の価値・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

第４章　夕日岩屋・朝日岩屋と豊後高田市
第１節　名勝としての夕日岩屋・朝日岩屋の意味・・・・・・・・・19
第２節　保存活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

参考文献・資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
【図版】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
■夕日岩屋・朝日岩屋　共通の図版・・・・・・・・・・・・・・・・22
図１：夕日岩屋・朝日岩屋の対象地域の位置を示す図面
図２：田染地区大字図
図３：田染地区村境概要図（江戸時代）
図４：夕日岩屋・朝日岩屋周辺小字図
図５：夕日岩屋・朝日岩屋の位置関係とルート
図６：夕日岩屋・朝日岩屋周辺の要素の位置図
図７：国東半島県立自然公園の規制の範囲

■夕日岩屋に関する図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図８：夕日岩屋範囲図（地形図）
図９：夕日岩屋範囲図（公図）

図 10：夕日岩屋範囲図（航空写真）
図 11：小崎地区から見た岩の名称
図 12：島原藩領田染組村絵図（小崎村）
図 13：田染八景図の内、間戸山月（安養寺蔵：正井和行作）

■朝日岩屋に関する図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図 14：朝日岩屋範囲図（地形図）
図 15：朝日岩屋範囲図（公図）
図 16：朝日岩屋範囲図（航空写真）
図 17：島原藩領田染組村絵図（間戸村）
図 18：間戸地区から見た岩の名称

【夕日岩屋・朝日岩屋に関する文献等】・・・・・・・・・・・・・・・・・36

■夕日岩屋に関する写真
【現況写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
写真１：夕日岩屋からの眺望（初夏）
写真２：夕日岩屋遠景
写真３：夕日岩屋からの眺望（夏）
写真４：夕日岩屋からの眺望（秋）
写真５：夕日岩屋
写真６：夕日岩屋の仏像
写真７：針の耳
写真８：金毘羅・拝み岩
写真９：金毘羅　石祠
写真 10：峯道の手摺り設置状況
写真 11：間戸ン岩遠景（ドローン撮影）
写真 12：夕日岩屋遠景（ドローン撮影）
写真 13：夕日岩屋遠景（ドローン撮影）
写真 14：田染荘小崎の農村景観ライトアップ（千年のきらめき）
写真 15：月が昇る前の夕日岩屋
写真 16：夕日岩屋からの眺望（夕刻）
写真 17：チャボツメレンゲ
写真 18：イブキシモツケ
写真 19：ブゼンノギク

【参考：登録区域外】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
写真 20：夕日岩屋への登り口
写真 21：遊歩道
写真 22：銘酒「窓の月」の広告
写真 23：復刻した「田染の夕 窓の月」

【古写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
古写真１：田染八景の一部（『西国東郡誌』より）
古写真２：田染間戸岩の遠景（『西国東郡誌』より）
古写真３：同夕日觀音の岩（小崎より望む）（『田染村志』より）
古写真４：田染間戸の風景（『市報ぶんごたかだ 昭和 45 年１月号』より）

■朝日岩屋に関する写真
【現況写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
写真 24：朝日岩屋
写真 25：朝日岩屋遠景（ドローン撮影）
写真 26：朝日岩屋
写真 27：朝日岩屋　木彫仏残欠
写真 28：田染小崎から田染真中に抜ける道
写真 29：朝日岩屋付近から朝日を望む
写真 30：イワヒバ

【参考：登録区域外】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
写真 31：二宮八幡神社
写真 32：穴井戸観音
写真 33：穴井戸観音（洞窟内部）
写真 34：間戸二層塔（間戸寺跡）

【古写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
古写真５：間戸の朝日岩（『田染村志』より）

第１章　夕日岩屋・朝日岩屋と周辺の環境

第１節　自然的環境

〇地理・地形的特徴

夕日岩屋・朝日岩屋は、豊後高田市南部に位置する田染小崎・田染真中の境界にあたる岩峰にある岩屋である。

国東半島はその中央にある両子山の火山活動によって形成される円形の半島であると説明されるが、田染地区は国東半島の付け根に位置し、大分県北部に特徴づけられる凝灰角礫岩質の火砕流堆積物（新生代第三紀・古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩）と、両子山の火山群（新生代第四紀）による岩石が、田染盆地を挟んで分布している。田染小崎の集落もこの古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地層の台地上に形成されており（田染小崎の台薗・原)、その先端部分に露出した岩盤を利用した井堰（田染小崎の山ノ口イゼ、フロノモトイゼなど）が形成された。また、その地質を活かして田染地区には大型の磨崖仏が作られてきた。田染平野の熊野磨崖仏【重要文化財・史跡】をはじめとして、田染上野の鍋山磨崖仏【史跡】、田染真中の元宮磨崖仏【史跡】、同じく大門坊磨崖仏【市指定史跡】が挙げられるが、これらは全て古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質の範囲に作られている。凝灰角礫岩層が侵食作用によって岩峰が屹立する耶馬渓式景観を呈しており、国東半島各地に分布する天台宗寺院群である六郷山の修行場として利用された他、田染地域内の各地域で名前付いた岩峰が多く所在し、伝承や民話の素材となっている。

一方の田染真中の集落は、約９万年前の阿蘇４火砕流（Aso-4）の堆積物によってできた台地であり、田染石と呼ばれる凝灰岩質の柔らかい石材が東側の崖面に露出している。田染石は江戸時代後期ごろから石材として重宝され、石造仁王や石祠など、田染石を使った石造物は田染地区だけでなく西国東に至る所に分布している。

桂川は、両子山を水源として、杵築市大田地区を通って、田染地区に流れ込み、河内地区を経て豊後高田市中心付近の河口に至っている。夕日岩屋から見える田染小崎には桂川の支流があり、小崎川をメインとして、大平川が流れ、多くの井堰によって水田を灌漑していることが分かる。逆に朝日岩屋から見える田染真中の間戸地区には川がなく、一ツ岡溜池・二宮溜池などの池を使った灌漑が行われてきた。

夕日岩屋・朝日岩屋のある岩峰は、古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地層上の凝灰角礫岩質の火砕流堆積物であり、田染小崎東端の華ヶ岳から田染真中・元宮磨崖仏の辺りまで伸びる尾根上にある。夕日岩屋・朝日岩屋の一帯は、屹立する岩峰が連続する耶馬渓式景観を呈している。一帯の岩峰は、地元では「間戸ン岩」と呼ばれ、小崎側から見れば、障子岩、地下足袋岩、線香岩、徳利岩、釣鐘岩、真中側から見れば、子負い岩など、岩の形状から名称が付けられているが、夕日岩屋・朝日岩屋がある岩山は「夕日観音（岩屋)・朝日観音（岩屋)」と呼ばれている。

屏風状に聳える岩峰の西側に所在するのが夕日岩屋、東側に所在するのが朝日岩屋である。夕日岩屋は田染小崎字竹ノ下に位置し、朝日岩屋は田染真中字旭に位置している。岩峰はほぼ垂直に屹立、麓との高低差は最大で６０メートルほどである。４０～４５メートルほどの高さの所に、夕日岩屋・朝日岩屋が位置している。夕日岩屋・朝日岩屋の岩質は、安山岩からデイサイト質の凝灰角礫岩であり、水平の層理構造が見られる。夕日岩屋・朝日岩屋は礫が少なくて柔らかい層に作られ、岩屋上部は大き目の礫が多数含

まれた硬い岩で構成されている。

田染地区では特に目立つ岩山であるとともに、小崎村・間戸村の境界にもなっていたことから、江戸時代前期に制作された島原藩領田染組村絵図にも岩の形がしっかりと描かれている。

○周辺の植生・動物

大分県の中でも国東半島は瀬戸内型気候域・旧火山地帯の植生が見られる。周防灘（すおうなだ）に面した地域は、年平均気温 15℃、年間降水量は 1500～1600㎜ で夏季の雨量は少ない地域である。冬季は周防灘を吹き抜ける冬季北西季節風の影響でしばしば降雪をみる。

夕日岩屋・朝日岩屋周辺は、アラカシ群落を基調としつつ、標高の高い範囲は原生に近いコジイースダジイ群落、更に急崖地についてはイブキシモツケーイワヒバ群落が展開している。夕日岩屋・朝日岩屋が所在するあたりは、イブキシモツケーイワヒバ群落であり、群生するイワヒバやイブキシモツケに加え、ブゼンノギク（環境省準絶滅危惧ＮＴ・大分県ＲＤ準絶滅危惧ＮＴ）、チャボツメレンゲ（環境省絶滅危惧Ⅱ類ＶＵ・大分県ＲＤ絶滅危惧ＩＢ類）などの絶滅が危惧される希少な植物が生育している。かつては岩上に松が生育し、昭和末期のマツクイムシの被害によって、現在松が見られるのは限定的な部分となっている。

麓付近は、杉・クヌギなどが植林されたり、クヌギを使った原木しいたけのホダ場として利用されてきているが、一部では管理が行き届かない部分があり、細く伸びた景観支障木としての杉の伐採や、その後のマダケ等の管理を、官民一体として行っている。

第２節　歴史的環境

夕日岩屋が所在する田染小崎、朝日岩屋が所在する田染真中（旧間戸村）は、豊後高田市南部の田染地区では西側に位置しており、田染荘の機能的な部分が集中する地域であった。

古代の田染地区は国東郡田染郷に位置しており、田染小崎は西叡山の尾根の麓に生じた小さな台地と、その周囲を流れる桂川の傍流・小崎川を使って、縄文時代以降集落が営まれてきた（上野原遺跡など）。また、田染真中の間戸村も台地状になった地形を利用して集落が営まれてきた。平安時代後期には、宇佐神宮の根本荘園・本御荘十八箇所の１つとして田染荘が開かれた。その後、田染小崎台薗集落には、荘官屋敷と見られる尾崎屋敷（現延寿寺）を中心に田染荘荘官らが住んだ集落が形成され、正和４年（1315）の「沙弥妙覚田畠等配分状（『永弘文書』）」をはじめとする史料に登場する中世地名（飯塚屋敷・かとのいやしき・ミすミのはたけ等）が、現在の屋号やシコナといった小地名（イイズカ・カド・ミスミ）と対照でき、メートル単位で中世の集落を復元できる稀有な地域である。

一方で、田染小崎と田染真中の間に聳える岩峰群には、古代以来、六郷山寺院の行場が開かれていき、岩峰上に開かれた夕日岩屋・朝日岩屋だけでなく、田染真中側には穴井戸観音や間戸寺跡、二宮八幡神社が所在し、田染小崎側には宝珠院跡・長野観音寺跡が所在し、間戸寺跡には南北朝時代の石造二層塔【市指定有形文化財】が残されていたり、長野観音寺跡にも戦国時代の紀年銘が入った浮彫五輪塔が残されているなど、中世の信仰に関する遺跡が残されている。また、穴井戸観音や二宮八幡神社は雨乞いに関する伝承が多く残されており、田染小崎・真中地区を中心にした地域の水の守り神として庶民からも篤く信仰されてきた。

中でも、二宮八幡神社は、中村の元宮八幡神社、上野村の三宮八幡神社と並び田染三社とされる神社で

ある。田染三社は、蕗村以外の田染荘全域の鎮守となっており、元は田染地区の郷社八幡社（元宮八幡神社）を観応２年（1351）に分祀したもので、間戸大明神（湍津姫命）、稲積大明神（市杵島姫命）に遷座したものとされる。これらの神社は農耕に関することから、井堰や水源地に関連すると指摘されており、二宮八幡神社については雨乞いの際には禁足地になっている「戸無し戸の口（田染小崎）」から水を汲んで境内に撒く、潮汲みの儀式が行われたとされている。

中世から近世にかけての田染地区の状況や景観を知る資料として、「島原藩領田染組村絵図【県指定有形文化財】」がある。これは元禄２年（1689）に島原藩の御役所に差し出した村絵図を原本としており、天保７年（1836）に田染村の様子を再度調査するために地元に送付された地図を、庄屋達が書き写したものである。各村の絵図を参照すれば、横嶺村から小田原に抜ける道以外には「何ぞ相変わり候儀これ無し」と記載があるため、この絵図は元禄２年頃の田染地区の様子を知る資料として使われている。

間戸村絵図を見ると、集落の形状・構成は現在と殆ど変化しておらず、岩峰の形状についても、子負い岩と呼ばれる特徴的な形状の岩などについて、ある程度忠実に描いていることが分かる。また、岩峰上には岩屋を示す記号が２つ描かれており、朝日岩屋と穴井戸観音を表している。一方の小崎村絵図についても、集落の形状・構成は殆ど現在まで継承されているが、岩山の方は間戸村絵図と比べると詳細には描き込まれていないことが分かる。

近世後期になると、間戸村から産出される柔らかい岩質の凝灰岩「田染石」が注目され、田染真中の周辺に石工が展開していく。それまでは国東半島で広く採掘できる硬い安山岩を使って石造物を作ってきたが、「田染石」は加工がしやすく、仁王像や狛犬、石祠などの彫刻を伴う石造物に重宝されていた。現在、田染地区では石工を営むものも少なくなったが、当時の石切場にて豊後石材が石材業を続けている（田染石は大分県立自然公園条例によって現在は採掘不可となっている）。

第３節　社会的環境

現在夕日岩屋は、県または市の指定名勝としては保護されていない。重要文化的景観の重要な構成要素であり、文化財以外の保護では、国東半島県立公園の一部（第２種特別区域）となっている。

昭和末～平成初頭にかけて、田染荘小崎の農村景観の保存運動が活発化し、平成 11 年には農水省・田園空間博物館整備事業によって、夕日岩屋は仏教遺跡・荘園村落遺跡の視点場として再整備され、遊歩道や手摺りが整備された。現在でも、地元住民からなる荘園の里推進委員会が管理をしており、遊歩道の清掃・除草などを行っている。

田染荘小崎地区では、荘園の里推進委員会が中心となって、景観を活かした地域づくりに取り組んでいるが、高齢化・人口減少による、景観維持・地域イベントの維持などが大きな課題となっている。

夕日岩屋自体は、田染荘小崎を訪れた人が回るコース上にあるが、経済的な効果が薄い状態が続いている。六郷山の峯道上にあることから、国東半島峯道ロングトレイル等のアクティビティでの利活用による収益化も目指されている。

豊後高田市教育委員会では、田染荘全域をフィールドミュージアムとして活用する取組を構想しており、富貴寺、真木大堂、熊野磨崖仏、田染荘小崎の農村景観をコアサイトとしつつ、田染荘全域のスケール感や歴史や景観を伝えるスポットを増やし、周遊性を高め、コンテンツに厚みを持たせる必要がある。田染荘の特設サイト（https://tashibunoshou.com）では、田染荘内の指定・未指定文化財を紹介し、観光客や地元住民が投稿した写真と紐づけて紹介する「#田染荘で撮りましょう」を運営している。

夕日岩屋を名勝地として保存し、景色や景観を活用する取組を継続することで、地域を盛り上げることに繋げたい。

第４節　これまでの研究

夕日岩屋・朝日岩屋の歴史的環境・自然的環境に関する検討は以下のようになされている。

田染荘における歴史学・文化財学的調査は昭和 56 年から行われた大分県立風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）による豊後国田染荘の調査である。同調査では、田染地区に残る荘園時代の遺構や、立荘以前から昭和時代にかけての土地利用の変遷について考察がなされ、鎌倉時代の神領興行法関連史料や近世の村絵図などから、田染地区の景観（水田や集落の地割など）が中世に由来する要素に特徴づけられることが確かめられた。夕日岩屋に関しては荘官屋敷を含む荘園の機能が集中した田染小崎地区の水田と集落の絶好の視点場として紹介され、六郷山の霊場としての夕日岩屋・朝日岩屋の履歴がまとめられた。

その後、平成初頭には田染荘遺跡の史跡指定の提案がなされたが、小崎地区に対しても圃場整備を行う動きが起こり、一時は保存を断念する事態にもなったが、農水省の田園空間博物館整備事業を受けて整備することが提起され、平成 11 年度からは同事業による整備を実施する方向性に舵を切った。その後、田染小崎地区は平成 22 年には重要文化的景観に選定され、夕日岩屋・朝日岩屋は重要文化的景観の重要な構成要素として、保存活用の両面で重要度を増してきた。

自然に関する調査では、平成 19 年から行われた大分県生活環境部による国東半島県立自然公園自然環境学術調査が、国東半島の悉皆的な自然に関する調査としては最初のもので、地質・地形・植生・動物などの分野について調査が行われた。また、重要文化的景観の保存計画を策定する調査も同平成 19 年から始まり、田染地区での地質・地形・植生・動物などの調査が行われている。

平成 26～27 年度にかけて行われた文化庁文化財部記念物課の名勝に関する特定の調査研究事業（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）においては、国東半島六郷山寺院に関する名勝調査が実施された。同調査においては、田染地区は一定の評価を受けながらも、六郷山寺院と関連して傑出する要素がないとして個別調査の対象から外れた。

そこで豊後高田市教育委員会では、平成 29～30 年度に文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて追加の名勝調査を実施し、平成 31 年３月には『国東半島田染名勝調査報告書』を刊行した。

本調査では、島原藩領田染組村絵図に描かれる岩峰の位置及び絵図作成時の視点場について深い検討を加えた。それらの情報はベースマップとした森林基本図・村絵図に落としただけでなく、緯度経度に紐づけて整理し、Google マップ上でも表示ができるようにし、風致を形成する要素同士の位置関係等について、より分かりやすく整理することができた。

また、特筆すべき風致を持つ６ヶ所（鍋山・喜久山・朝日岩屋・夕日岩屋・穴井戸観音・ウトノアナ及びゼゼノサマ・西叡山）について、文献調査や現地調査（踏査やドローン撮影）を実施し、調査委員の専門領域毎にもその価値をまとめていただいた。夕日岩屋・朝日岩屋は、田染荘の信仰に関する要素と、荘園村落との関係性の部分で評価され、江戸時代後期に選定された田染八景によって観賞的視点が添えられたことがまとめられた。

本調査によって、田染地区における岩峰群の風致のなりたちや特性、荘園時代に基盤を置く風致の時代的な連続性や関連性について、新たな知見を多く得ることができた。

第２章　夕日岩屋の内容と価値

第１節　夕日岩屋の風致景観に対する評価の歴史的変遷

〇六郷山の修行場としての夕日岩屋

前章の歴史的環境でも述べたが、夕日岩屋は馬城山の末寺として建武４年(1337)の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」にも記載される六郷山寺院の行場の１つであった。岩屋内に残される木彫仏の残欠を見ると、残欠ながらつくりの特徴から平安時代のものと推定されており、田染地域一帯の六郷山寺院の発展と同じような時期に成立したものと推定されている。また、南北朝時代には既に「夕日岩屋」と呼ばれていたことから、西側を向いていたことが意識されている。

その後、江戸時代前期に描かれた田染組小崎村絵図においては、間戸ン岩の岩峰が描かれているものの、岩屋自体は描かれていない。

その後、江戸時代後期にかけて、間戸ン岩一帯は、田染の四国八十八箇所写し霊場の一部が設定されて、観音菩薩が安置されたことから、「夕日観音」と親しまれるようになり、また、中間の露頭に金毘羅の石祠がつくられて祭りが行われるようになるなど、農村の人々の祈りの場と化していった。

〇田染八景の選定と観賞的視点

江戸時代の後期から末期になると、大分県北部から国東半島にかけての景勝地に観賞的視点が加えられるようになる。天明８(1788)年には大神某が高田八景を選定し、日野資枝が和歌を詠み、文政元(1818)年に頼山陽が「耶馬渓山天下無」と漢詩を詠んだ翌年の文政２年には、国学者高井八穂（生没年未詳）らによって夷谷で和歌の題として夷谷八景が定められた。

田染では、杵築藩の武士・学者らによって芸術的視点が添えられた。杵築藩の家老に家に生まれた十市石谷（1793-1853）は、杵築南画（豊後南画の内、杵築藩士などで構成される画壇で、特に石谷とその子の王洋の絵画は近代初頭に高い評価を受けた）の祖とされ、中津の片山東籬（生没年未詳）に絵を学び、田能村竹田（1777-1835）らとも交流があり、豊後高田では本草学者・賀来飛霞（1816-1894）などを弟子にするなど、国東半島で広く画業を行った人物である。石谷は山水画の画題として田染八景を定めたとされる。田染八景は、叡峰曙雪・池部群鷺・桑川螢火・本宮晴嵐・間戸山月・大堂晩鐘・熊岳櫻花・鍋山啼猿の８つの風物で、すべて場所を特定できる。

その後、同じく杵築藩の儒員・島徳世（生没年未詳）が田染八景を題材に一首ずつ漢詩を詠んでおり、間戸山月については、次のように詠んだと伝えられている。

間戸由来翠色濃、幽林怪石路重々、於中勝景君知否、月上巉巌百尺松、（間戸の由来にもなっている緑色は濃く、奥深い静かな林の怪石にある道は幾重にもかさなっている。その中にある景勝を君は知っているだろうか。月が高く聳える岩峰の百尺にもなる松を昇っていく様子だ。）

近代に入って、『西国東郡誌（大正 12 年)』『田染村志（昭和７年)』「市報ぶんごたかだ（昭和 45 年 1 月の写真など)」、岩山を見上げる写真が掲載され、その特徴的な岩山は鍋山（南屏峡）や、熊野の岩峰などと共に「田染耶馬」と呼ばれるようになる。

○田染荘を象徴する視点場に

その後、夕日岩屋は奇岩観賞の場ではなく、田染小崎の水田を見下ろす視点場として著名になっていく。この景色が広く知られるようになったのは、『豊後国田染荘の調査（昭和 61 年)』によって、田染小崎の水田の歴史的景観の評価が高まったことによる。

昭和後期から平成前期にかけて、田染地区にも圃場整備が導入され、多くの水田はその形状を変えて、以前の姿を失っていった。その中で、田染小崎は荘園村落遺跡を残すために、水田の形状や水利慣行を残すこととなった。田染小崎では平成 11 年から始められた農水省の田園空間博物館整備事業によって農村全体の整備を行い、夕日岩屋はその視点場として位置づけられた。その後、平成 22 年に田染荘小崎の農村景観が重要文化的景観になり、平成 25 年に田染小崎が GIAHS（世界農業遺産）のコアサイトとなって、田染荘小崎の景観が評価されると、夕日岩屋からの景色が大きく紹介されて著名になっていた。

特に最近では夕日岩屋という名称から、夕日観賞・撮影に訪れる人も多く、特に水田に水を張る６月には岩山上に所せましとカメラマンが並ぶようになった。

☆年表

年号	事柄
平安～鎌倉時代	夕日岩屋の成立（仏像から)。
建武４年（1337）	『六郷山本中末寺次第幷四至等注文案』に、喜久山の末寺として「夕日岩屋」が見える（史料上の初出)。
元禄２(1689)年	島原藩領田染組村絵図の内、小崎村絵図に夕日岩屋の岩峰が見える。
江戸時代後期	杵築藩の絵師・十市石谷によって、田染八景が定められる。
江戸時代後期	杵築藩の儒員・島徳世によって、田染八景に漢詩が添えられる。
明治 40(1907)年	井上円了が鍋山周辺を訪れて田染八景の漢詩を詠む。その後、紀行文『南船北馬集』にその事を掲載する。
昭和 26 年	国東半島県立自然公園に指定される。
昭和末～平成初頭	田染荘の保存運動が活発化し、その視点場として夕日岩屋が紹介されるようになる。
平成 22 年	田染荘小崎の農村景観が、重要文化的景観に選定され、夕日岩屋も重要な構成要素及び視点場となる。
平成 25 年	国東半島宇佐地域が世界農業遺産（GIAHS）に認定され、夕日岩屋が田染荘小崎の景観を見る際の視点場となる。

第２節　構成要素及び周辺の要素

○夕日岩屋

田染小崎と田染真中の境界に屹立する凝灰角礫岩の、田染小崎側につくられた岩屋。岩峰から西側を望む位置につくられている。古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質にあり、高さ 40～60 メートルほどの岩峰が連なっている。岩峰上の水平の層理構造の、礫が少ない柔らかい岩質の部分を穿って岩屋が作られている。中には、木彫仏残欠や石仏が祀られており、現在でも六郷山の霊場として、峯入りの札所になっている。建武４年(1337)の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」では、馬城山の末寺として記載され

ている。
　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館による豊後国田染荘の調査以来、田染小崎の水田や集落を見る際の好視点場となっており、平成 22 年に選定された重要文化的景観、平成 25 年に認定された世界農業遺産の視点場としても利用されている。

〇夕日岩屋の木彫仏残欠・石仏
　夕日岩屋の中には、一木造などの様式から平安時代のものと推定されている木彫仏残欠（観音菩薩カ）と、江戸時代から近代にかけての石仏が残されている。

〇針の耳
　夕日岩屋の北側数メートルの所にある細い岩の割れ目。針の耳は、国東半島や北部九州の修験系の修行場の名前にはよくあるもので、くぐり抜けることは、生まれ変わりを意味するとされている。

〇拝み岩
　夕日岩屋のある岩峰から西側に突き出た露頭の名称。元々は西叡山への遥拝を行うことから拝み岩と名付けられたされる。
　手前側には金毘羅の石祠があり、田染地区で盛んであった風籠り（大風除け）の場であった。その為、ここを金毘羅と呼ぶ地元の人も多い。

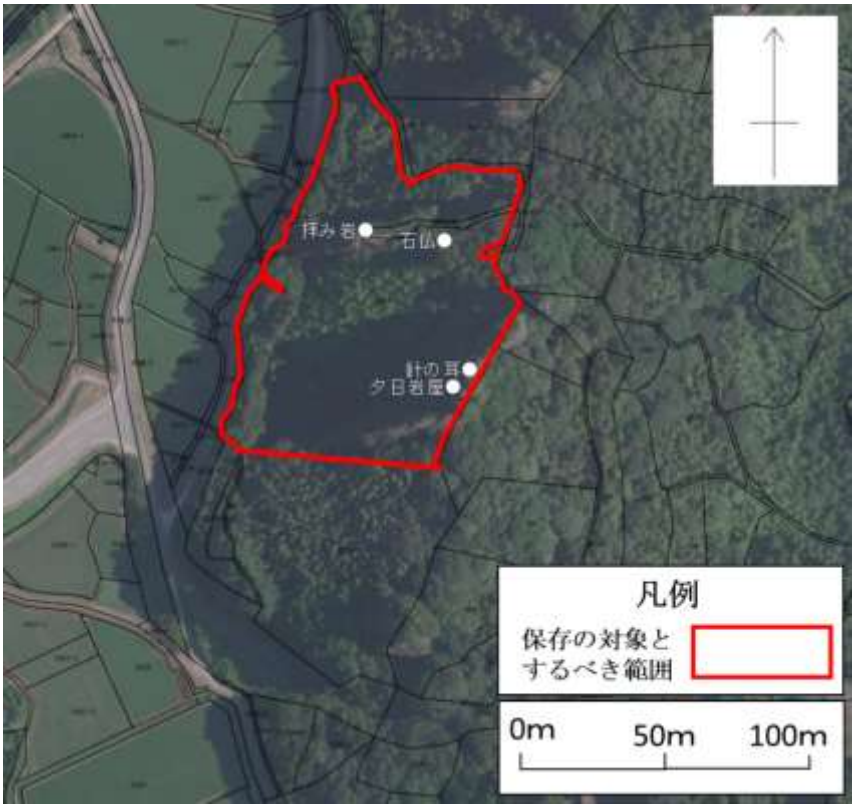
〇田染四国八十八箇所の写し霊場の石仏
　夕日岩屋以外にも、拝み岩のすぐ先の岩室に四国八十八箇所の写し霊場が設けられている。

☆周辺の要素
〇田染荘小崎の水田
　夕日岩屋の西側に望む田染小崎の水田。土地利用の形態がほとんど中世から変化しておらず、地形に合わせて曲線を描く水田は美しい。夕日岩屋から水田景観が一望でき、田染荘のメインビジュアルとして定着している。全体が重要文化的景観「田染荘小崎の農村景観」の重要な構成要素となっている。

〇西叡山
　夕日岩屋又は金毘羅からみて北西側に見える高い山。平安時代には中腹に六郷山本山本寺の「高山」が所在し、伝承や民話では大火災に見舞われて、焼けた仏像が山の四方に飛び散ったとされている。
　金毘羅からは正面に近い位置に西叡山があることから、金毘羅が高山の遥拝の場として「拝み岩」と呼ばれる由来となったとされる。

〇朝日岩屋
　夕日岩屋の所在する岩峰の裏側、東側を望む位置にある岩屋。夕日岩屋と同じく建武４（1337）年の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」に登場し、夕日岩屋と対置されている岩屋である。

☆夕日岩屋の構成要素位置図



☆夕日岩屋の周辺の要素位置図

第３節　夕日岩屋の価値

田染小崎の東端に位置する「夕日岩屋」は、南北に屏風状に立つ岩峰につくられた西方を望む岩屋の名勝地である。岩屋から西方を望むと、荘園村落遺跡として著名な田染荘小崎の水田を一望でき、地形に沿ってつくられた畦の曲線がよく見える。村落景観の後背には、国東半島全域に展開する天台宗寺院群・六郷山の象徴である西叡山が望める。

国東半島の西側の付け根にあたる田染地区は、古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩と両子山の火山群の岩石がつくる岩峰に挟まれた盆地状の地形をしている。特に古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質の場所には、特に垂直に屹立した岩石が露出した場所が多く、その地形を活かして、古来より熊野磨崖仏に代表される大型の磨崖仏が造顕されたり、観賞の対象となってきた。

夕日岩屋のある岩峰群は、約９万年前の阿蘇カルデラの形成に伴う火砕流によりつくられた古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の火砕流台地が、蛇行する小崎川の差別侵食を受けて形成されたものである。岩峰の高さは約６０メートルに及び、薄く屏風状に立ち上がっている。岩峰の上から３分の１の高さの所にある水平層理を利用して峯道がつくられ、屏風状の岩峰の中心あたりに岩屋が穿たれている。岩屋上部は大きな礫の多い硬質な層で、岩屋自体は礫の少ない柔らかい層を削って作られている。

夕日岩屋は、平安時代に六郷山寺院の行場が岩山の上に展開する中で成立したと考えられ、岩屋内に残された木彫仏の残欠がそれを物語っている。建武 4 (1337) 年の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」では、馬城山（現在の真木大堂）の末寺として夕日岩屋の名が見え、この頃から既に西側を望む岩屋の位置と、朝日岩屋との対置を強く意識していたことが分かる。

その後、江戸時代後期には、杵築藩の絵師・十市石谷によって、鍋山などとともに「間戸山月」として田染八景に選定され、後に杵築藩の儒員・島徳世によって田染八景は漢詩に詠みなおされた。月がかかる岩峰の風景は、一帯の岩峰を見上げて観賞する文化を生み、大正 12 年の『西国東郡誌』で紹介され、その後も「田染耶馬」の一部としてよく紹介された。

昭和末期から行われた大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館による荘園調査によって、田染荘の荘園村落遺跡を見下ろす視点場として注目されるようになり、平成 18 年には田園空間博物館整備事業の展望所として手摺り等が整備され、平成 22 年には重要文化的景観「田染荘小崎の農村景観」の重要な構成要素になり、平成 25 年に認定された世界農業遺産（GIAHS)「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島宇佐の農林水産循環」における国東半島宇佐地域の農業システムを俯瞰できる視点場として改めて評価された。

以上のように、夕日岩屋は古代に六郷山寺院の行場として成立し、中世以来その西側を望む地形を意識して名付けられた岩屋で、独特な形状の岩峰群がつくる風致は近世以降に観賞の対象となり、近年は田染荘小崎の荘園村落を俯瞰する視点場としても著名で重要である。

第３章　朝日岩屋の内容と価値

第１節　朝日岩屋の風致景観に対する評価の歴史的変遷

〇六郷山の修行場としての朝日岩屋

朝日岩屋は馬城山の末寺として建武４年（1337）の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」にも掲載される六郷山寺院の行場の１つであった。こちらは岩屋の中に間戸集落で採掘できた田染石でできた石造覆屋が設けられており、中には木彫仏が３躯収められている。これらの木彫仏はいずれも損傷・摩耗が激しいが、伝承によれば北西の西叡山にあった仏像で、西叡山の高山の火災の際に焼けながら飛んできた「焼仏」であるとされている。これらは平安時代から中世の作と考えられており、六郷山寺院の行場が岩峰上に展開した平安時代に朝日岩屋も成立したと推定されている。また、南北朝時代には既に「朝日岩屋」と呼ばれていたことから、東側を向いた地形が意識されていることも分かる。また、朝日岩屋を含む集落の小字名も「旭」となっており、古くから朝日岩屋と地域の結び付きが強かったことが分かる。

その後、江戸時代後期に、間戸ン岩一帯が、田染の四国八十八箇所写し霊場の一部となり、観音菩薩が本尊とされたことから、「朝日観音」と親しまれるようになった。同じ間戸地区にある穴井戸観音とあわせると多くの観音菩薩が祀られているが、観音菩薩は水の信仰と関係が深いとされている。間戸地区は古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の火砕流堆積物が分厚く台地状に堆積しており、周辺に川がなく、田染地区でも特に水の確保が課題となって地域である。その中で、朝日観音は村人から信仰の対象として一層重要視されていたと考えられる。

〇島原藩領村絵図に描かれた岩屋

江戸時代前期に元図が描かれた田染組間戸村絵図において、間戸ン岩の岩峰は小崎村絵図のそれと比べてもかなり形状を似せて描かれている。また、岩峰の中には白い丸が２つ描かれており、南側が朝日岩屋、北側が穴井戸観音である。その事から、元禄２年(1689)の段階で、間戸集落から見える間戸ン岩の岩峰はランドマークとして機能していたことが分かる。

現在でこそ朝日岩屋周辺の植物の繁茂や杉の植林などで、集落から岩屋が見えづらい状況にあるが、昭和初期に撮影された『田染村志』の朝日岩屋の写真を見てみると、樹木は少なく朝日岩屋の影がハッキリ視認できる。

☆年表

年号	事柄
平安～鎌倉時代	朝日岩屋の成立（仏像から）。
建武４年（1337）	『六郷山本中末寺次第幷四至等注文案』に、馬城山の末寺として「朝日岩屋」が見える（史料上の初出）。
元禄２(1689)年	島原藩領田染組村絵図の内、間戸村絵図に朝日岩屋と岩峰が見える。
江戸時代後期	杵築藩の絵師・十市石谷によって、田染八景が定められる。
江戸時代後期	杵築藩の儒員・島徳世によって、田染八景に漢詩が添えられる。
明治４０(1907)年	井上円了が鍋山周辺を訪れて田染八景の漢詩を詠む。その後、紀行文『南船北馬

	集』にその事を掲載する。
昭和２６年	国東半島県立自然公園に指定される。
昭和末～平成初頭	田染荘の保存運動が活発化し、朝日岩屋も保護の対象とされる。
平成 22 年	田染荘小崎の農村景観が、重要文化的景観に選定され、朝日岩屋も重要な構成要素となる。

第２節　構成要素及び周辺の要素

〇朝日岩屋

田染真中と田染小崎の境に聳える岩峰の、田染真中側の岸壁にできた水平層理の柔らかい部分を利用してできた岩屋。東側に位置することから朝日岩屋と名付けられ、夕日岩屋と対置的な存在となっている。夕日岩屋に比べて岩屋の仏壇面が水平に均して作られており、仏像を安置するために石造覆屋が設けられている。

〇朝日岩屋の木彫仏残欠及び石仏

朝日岩屋の石造覆屋内には、木彫仏の残欠が４躯と石仏１躯が安置されている。木彫仏は摩滅等が激しく痛々しい見た目であるが、頭体が一木で作られていることなどから、古い様式を継承していることが分かる。像容がある程度分かる２躯の内、坐像は如来形、立像は菩薩形である。残りの２躯は未詳である。

石造の千手観音像は、田染地区に設定された四国八十八箇所霊場の写し霊場のもので、田染石製で近代の作である。

〇石造覆屋

朝日岩屋には田染石と杉板を使って造られた石造覆屋が作られている。設置年代等の詳細は不明であるが、近代以降に地元石工が作ったものであると考えられる。柔らかい岩を使用しているため、傷や落書きが著しい部分がある。基礎部分はブロック塀を積み上げて造られている。

〇石燈籠

石造覆屋と同時期に設置されたと思われる石燈籠。田染石で作られている。

〇石祠と弘法大師像

石造覆屋の向かって右側に石祠の中に安置された弘法大師像ある。石造覆屋の中の千手観音の石仏とセットになっていると考えられる。

〇鎖場

朝日岩屋に向かう道中、西から東へ尾根を越す場所は、急傾斜になっており、鎖場が設けられている。

【周辺の要素】

○夕日岩屋

朝日岩屋の所在する岩峰の裏側、西側を望む位置にある岩屋。朝日岩屋と同じく建武４（1337）年の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」に登場し、朝日岩屋と対置されている岩屋である。

○間戸寺跡

間戸ン岩の東側にあったとされる六郷山寺院。現在は南北朝時代の石造二層塔【市指定有形文化財】や、寺院の基礎となった場所の伝承地が周囲に残っている。

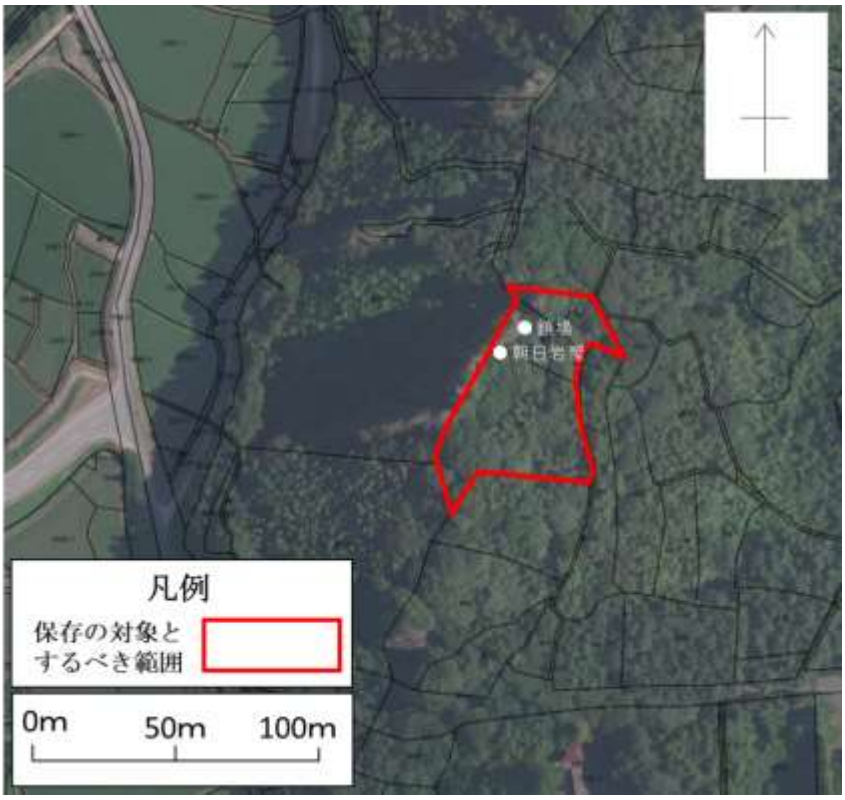
○二宮八幡神社

間戸村の鎮守でもあり、田染三社の１つとして間戸村・小崎村・横嶺村の３ヶ村の鎮守にもなっている。雨乞いの際には、小崎村の愛宕社にて小崎川の水を汲んで撒く「潮汲み」でも雨が降らなかった場合に、禁足地「戸無し戸の口」の水を汲んで二宮八幡神社の境内で撒いたという。

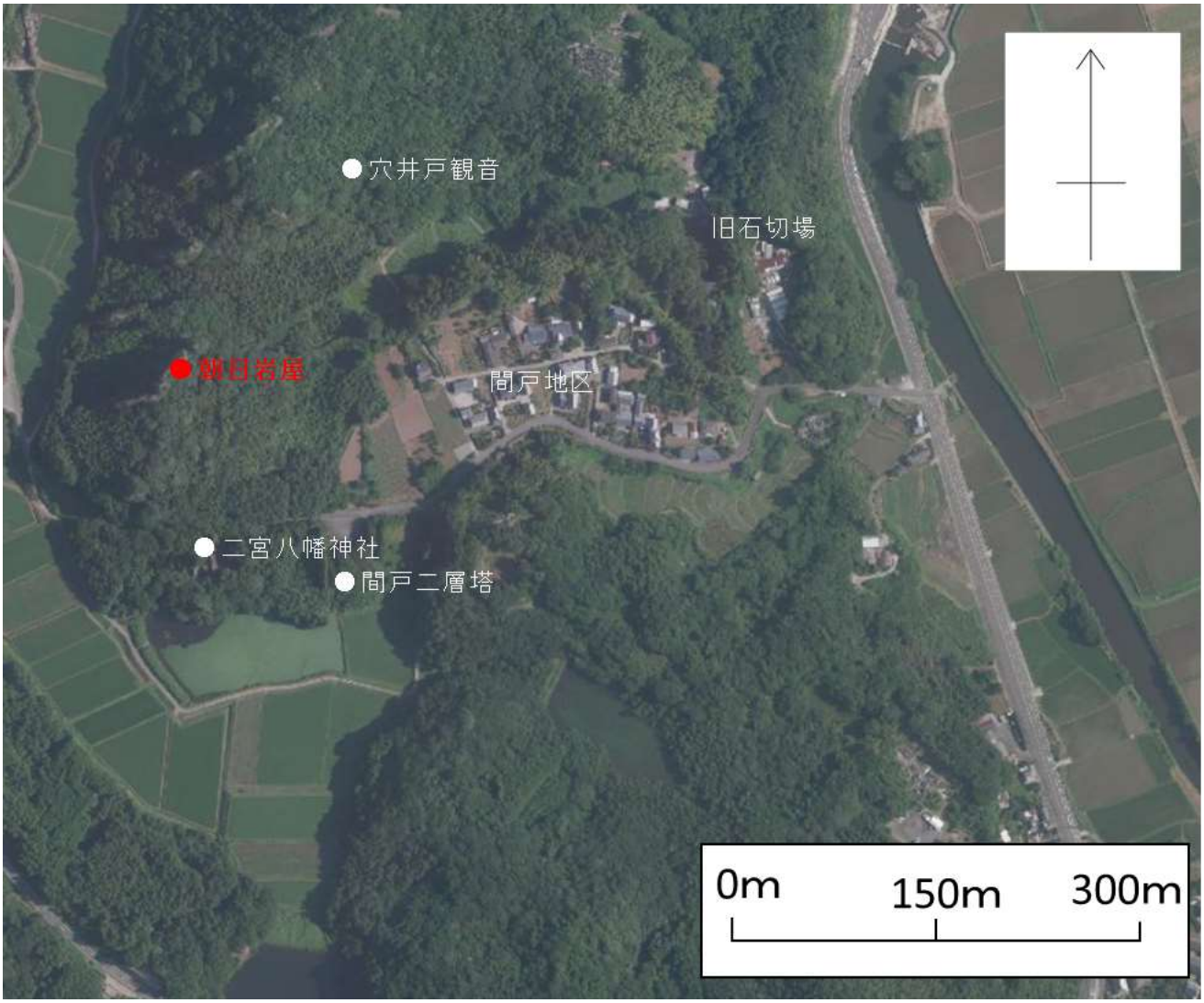
○穴井戸観音

間戸村の北西側に位置する洞窟状の小堂。年中水が枯れる事がないと言われ、本尊の濡れ観音には水が滴っている。洞窟の先は、田染村全域で雨乞いを行う際に水を汲む玉津の「権毛（ゴンゲ）」に繋がっているという伝承がある。

☆朝日岩屋の構成要素位置図



☆周辺の要素位置図



第３節　朝日岩屋の価値

田染真中の間戸集落の西端に位置する「朝日岩屋」は、南北に屏風状に立つ岩峰につくられた東方を望む岩屋の名勝地である。

国東半島の西南部に盆地状に広がる田染地区の中でも、間戸集落は阿蘇４火砕流（Aso-4）の堆積物によってできた台地であり、東方への視界が広くなっている。阿蘇４火砕流の堆積物は、凝灰岩系の柔らかい質の岩石を含み、間戸集落周辺で採れたこの岩石を「田染石」と呼んでおり、江戸時代後期以降、その加工のしやすさから、田染地区の石工に好んで利用され、田染地区だけではなく西国東の広い範囲で田染石の石造物を見ることができる。

一方、朝日岩屋がある岩峰群は、田染地区の山岳地形を形成する主な地質である古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の岩峰が、長い年月をかけて河川などの侵食を受けて屹立したものである。高さは約６０メートルになり、水平層理の比較的柔らかい地層を利用して、峯道や岩屋が形成されている。

朝日岩屋は、平安時代に六郷山寺院の行場が岩山の上に展開する中で成立したと考えられ、岩屋内には田染石で組まれ、杉板の屋根を付けた石造覆屋があり、その中には平安～中世にかけての木彫仏残欠と、近世の石仏が安置されている。田染石製の石造覆屋や鎖場は、近代に入ってから地区住民によって作れたもので、岩屋の信仰が地域に根付いていたことを示している。

木彫仏に関しては、六郷山成立期に筆頭寺院だったとされる西叡山の高山の火災の際に、西叡山から飛んできたと伝承される。建武４(1337)年の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」では、馬城山（現在の真木大堂）の末寺として朝日岩屋の名が見え、この頃から既に東側を望む岩屋の位置と、夕日岩屋との対置を意識していたことが分かる。また、同岩峰の東側には、間戸寺跡・穴井戸観音などの六郷山寺院に関連する遺跡や遺構が多く残されており、周辺の村の鎮守である二宮八幡神社も鎮座しているなど、信仰の対象が集まっている。

その後、元禄２（1689）年に原本がつくられた「島原藩領田染組間戸村絵図」において、該当する岩山の朝日岩屋の箇所には、白丸の記号により岩屋が示してあるなど、小崎村絵図にはない表現が見られ、江戸時代前期の段階で既に朝日岩屋がランドマークとして意識されていたことが分かる。また、周囲の岩峰の形状等についても、同じ岩峰を描いている小崎村絵図と比べて、より詳細に書きこまれていることが分かる。

以上のように、朝日岩屋は古代以来、六郷山寺院の行場として成立し、東側を望む地形を意識して名付けられた岩屋で、独特な形状の岩峰群と集落から見える岩屋は、村絵図に描かれるなどランドマークとなっただけでなく、近世以降は観賞の対象としても著名で重要である。

第４章　夕日岩屋・朝日岩屋と豊後高田市

第１節　名勝地としての夕日岩屋・朝日岩屋の意味

豊後高田市は田染地区の文化財や歴史的景観の保護に古くから取り組んでいる。

昭和 50 年代より、大分県立風土記の丘歴史民俗資料館による荘園村落遺跡詳細分布調査が始まると、その最初のフィールドとして豊後国田染荘が選ばれ、かねてより知られた仏教遺産（富貴寺大堂や磨崖仏など）だけではなく、荘園村落遺跡として保護するべきという提起がなされてきた。

豊後国田染荘の調査が終了してから平成初頭にかけては、富貴寺境内・小崎の集落と水田景観・長野観音寺跡・朝日岩屋・夕日岩屋・大曲地区の水田景観・熊野墓地・牧城と城山薬師堂・烏帽子岳城・蕗政所跡など、荘園を形成する様々な要素をまとめて、史跡指定を目指すといった方向性も示された時期もあった。

その後、田染荘小崎の保全が進む中で、夕日岩屋はその視点場として紹介されるようになっていく。平成 11 年に始められた農水省の田園空間博物館整備事業による整備では、遊歩道及び手摺りの再整備が行われ、安全に夕日岩屋に向かうことができるようになった。平成 22 年には、田染荘小崎の農村景観が重要文化的景観に選定されると、夕日岩屋はその重要な構成要素となり、また、選定地全体を見渡せ、景観構造の理解に役立つ視点場となった。平成 25 年に認定された世界農業遺産においても、同様に田染荘小崎を見渡す視点場としてコアサイトとなっている。夕日岩屋から見た田染荘小崎の農村景観は、豊後高田市の風土を紹介する際のキービジュアルによく利用されている。

また、平成 25～27 年度に実施された大分県の名勝に関する特定の調査研究事業によって、国東半島の岩山景観と六郷山寺院群にまつわる名勝地について検討がなされ、田染地区については平成 28～29 年度にかけて、文化庁の補助事業として田染耶馬名勝調査事業を実施し、平成 30 年３月に『国東半島田染名勝調査報告書』を刊行した。同調査では、島原藩領田染組村絵図をベースに、岩山景観と荘園との関係性について調査を行い、夕日岩屋も特定調査地となり、信仰と視点場について、荘園村落遺跡との関連性について言及された。

夕日岩屋は、中世以来の六郷山寺院群の霊場としてだけでなく、田染荘小崎の農村景観を見渡す際の視点場として著名である。重要文化的景観や世界農業遺産として紹介される田染荘の風景は、市民にとっても馴染み深く、名勝地として保全することで、夕日岩屋をより良く保存活用していきたい。

朝日岩屋は、中世以来の六郷山寺院群の霊場であるだけでなく、江戸時代の村絵図に描かれるなどランドマークとして捉えられてきた。古くから観賞の対象となってきた岩山は、市民にとっても馴染み深く、名勝地として保全することで、朝日岩屋をより良く保存活用していきたい。

第２節　保存活用について

今回「夕日岩屋」「朝日岩屋」として保護すべき範囲は険しい岩山であり、登山道も完成しているため、現状では新たに開発行為が行われる状況ではない。日常の管理としては、地元住民が６月の御田植祭の前や夏季に登山道の草刈りを実施したり、景観保護のための竹木の伐採を定期的に実施している。夕日岩屋は屹立する岩山が中心となる名勝地であるので、周囲の災害対策（事故防止や防災）などの計画と連動した保存・メンテナンスが必要となってくる。

活用については、重要文化的景観や世界農業遺産などの視点場として引き続き活用するほか、観光の取組では国東半島峯道ロングトレイルや、初夏の田植え前の水面に映る夕日観賞の場としても活用を進めていきたい。

また、令和４年に日本遺産の関連事業で、昭和 50 年代まで田染真中の渡邊酒造場が醸造していた銘酒「窓の月」を、「田染の夕 窓の月（たしぶのゆうべ　まどのつき)」として復刻して開発し、令和５年４月より販売を開始した。渡邊酒造場は、現在でも酒蔵の一部が残されており、地域の観光案内兼集会施設「蔵人」としてリノベーションがなされている施設である。今回の「窓の月」復刻をキッカケに、田染八景「間戸山月」の歌に詠まれたような、間戸ン岩と月を賞でる文化を継承していく取組も行う予定である。

令和４年に登録記念物（名勝地関係）に登録された「鍋山（南屏峡)」や、田染耶馬名勝調査の他の特定調査地、その他の史跡・重要文化的景観との連携をしながら、保存活用に努めていきたい。

以下に、夕日岩屋の保存活用における課題を整理しておく。

①景観保全の継続実施	現在実施されている景観保全の継続実施
	景観保全に関する後継者・協力者の育成
②周知広報・普及啓発	出前講座など市民向けの見学イベント
	動画等を用いた夕日岩屋・朝日岩屋の紹介
③観光事業の検討	国東半島峯道ロングトレイル等での利用促進
	日本酒「田染の夕 窓の月」を活用した取組促進

○参考文献・資料

大分県企画振興部景観自然室編『国東半島県立自然公園環境学術調査報告書』(2009 年)

大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国田染荘の調査』(1986 年)

田染村志編集委員会『田染村志』(1932 年)

文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業)』(2016 年)

豊後高田市教育委員会『六郷満山寺院群詳細調査事業報告書』(2016 年)

豊後高田市教育委員会『重要文化的景観　田染荘小崎の農村景観　保存計画』(2016 年)

豊後高田市教育委員会『国東半島田染名勝調査報告書』(2019 年)

豊後高田市教育委員会『鍋山（南屏峡）名勝調査報告書』(2021 年)

豊後高田市『豊後高田市史』(1998 年)

西国東郡編『西国東郡誌』(1923 年)

○参考史料

『島原藩領田染組村絵図』(1836 年／1689 年原本、豊後高田市所有)

『六郷山諸勤行幷諸堂役祭等目録写』(1228 年、長安寺文書)

『六郷山本中末寺次第幷四至等注文案』(1337 年、長安寺文書)

『豊前豊後六郷山百八十三ヶ所霊場記』(1755 年、霊仙寺所蔵)

夕日岩屋・朝日岩屋
名勝調査報告書
資料編

【図版】

■夕日岩屋・朝日岩屋　共通の図面

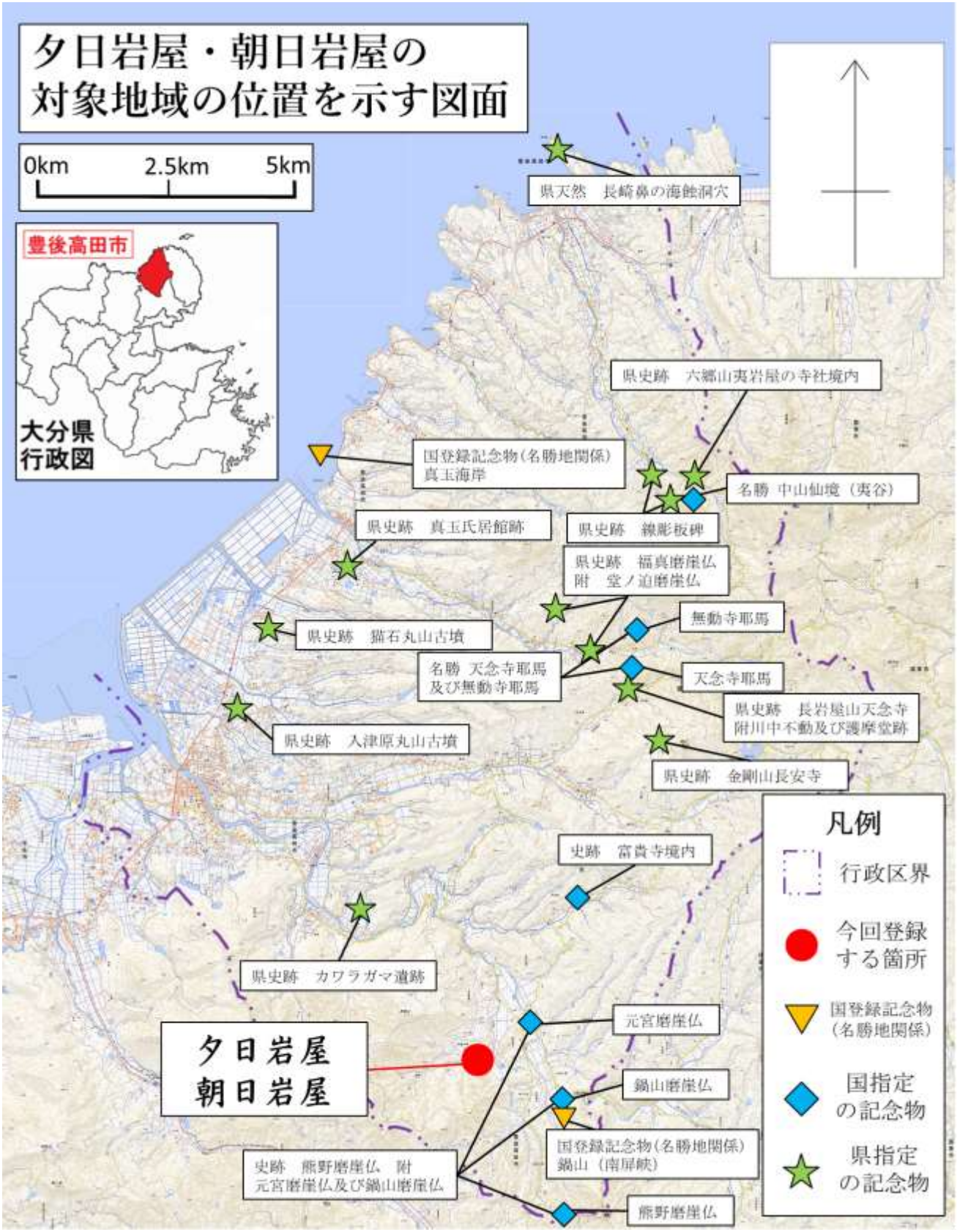


図１：夕日岩屋・朝日岩屋の対象地域の位置を示す図面

田染地区大字図
田染蕗
田染池部
田染相原
田染横嶺
田染真中
夕日岩屋
朝日岩屋
田染小崎
田染上野
田染真木
田染平野
0m
1km
2km

図２：田染地区大字図

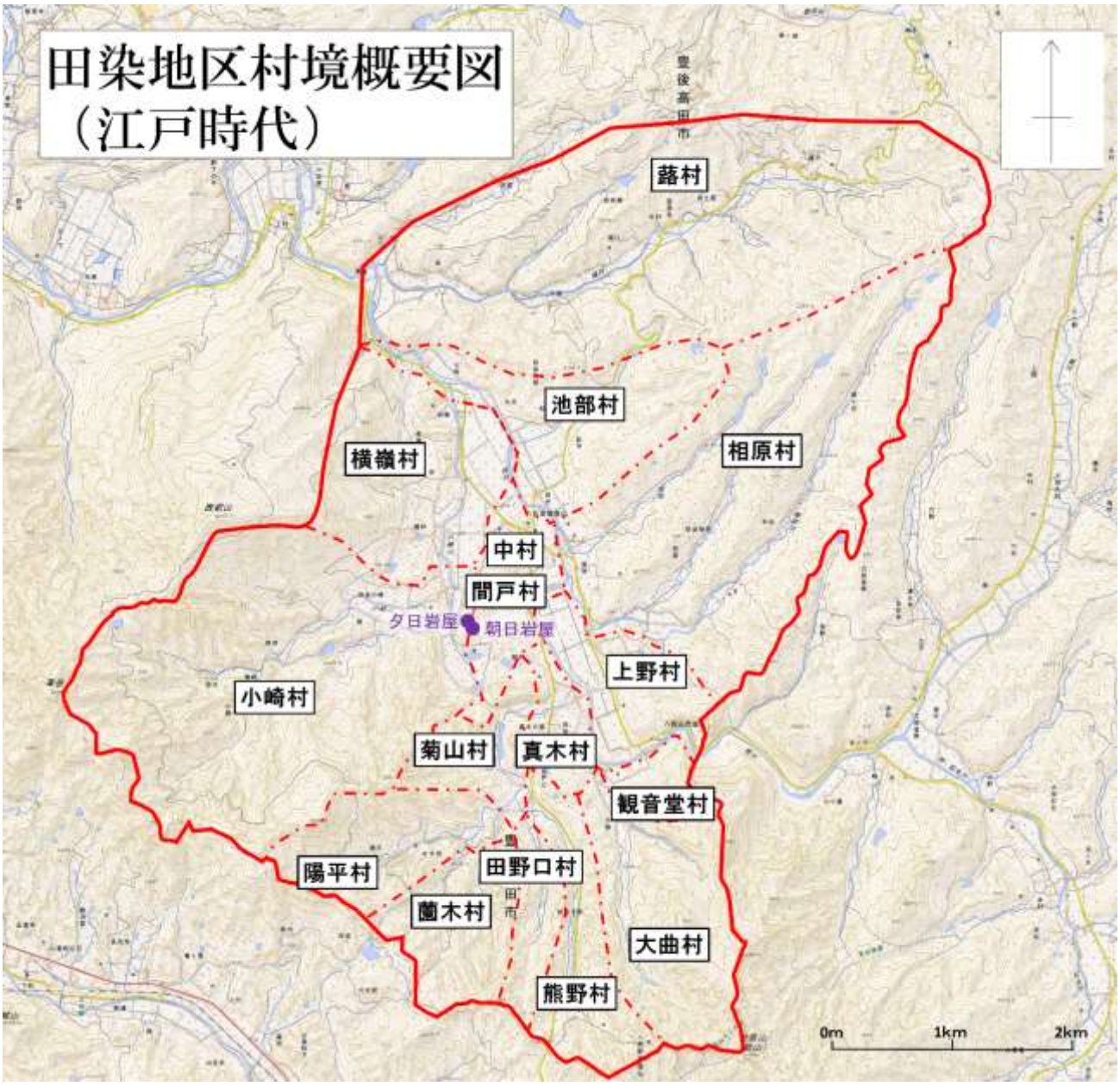


図３：田染地区村境概要図（江戸時代）

図４：夕日岩屋・朝日岩屋周辺小字図

図５：夕日岩屋・朝日岩屋の位置関係とルート

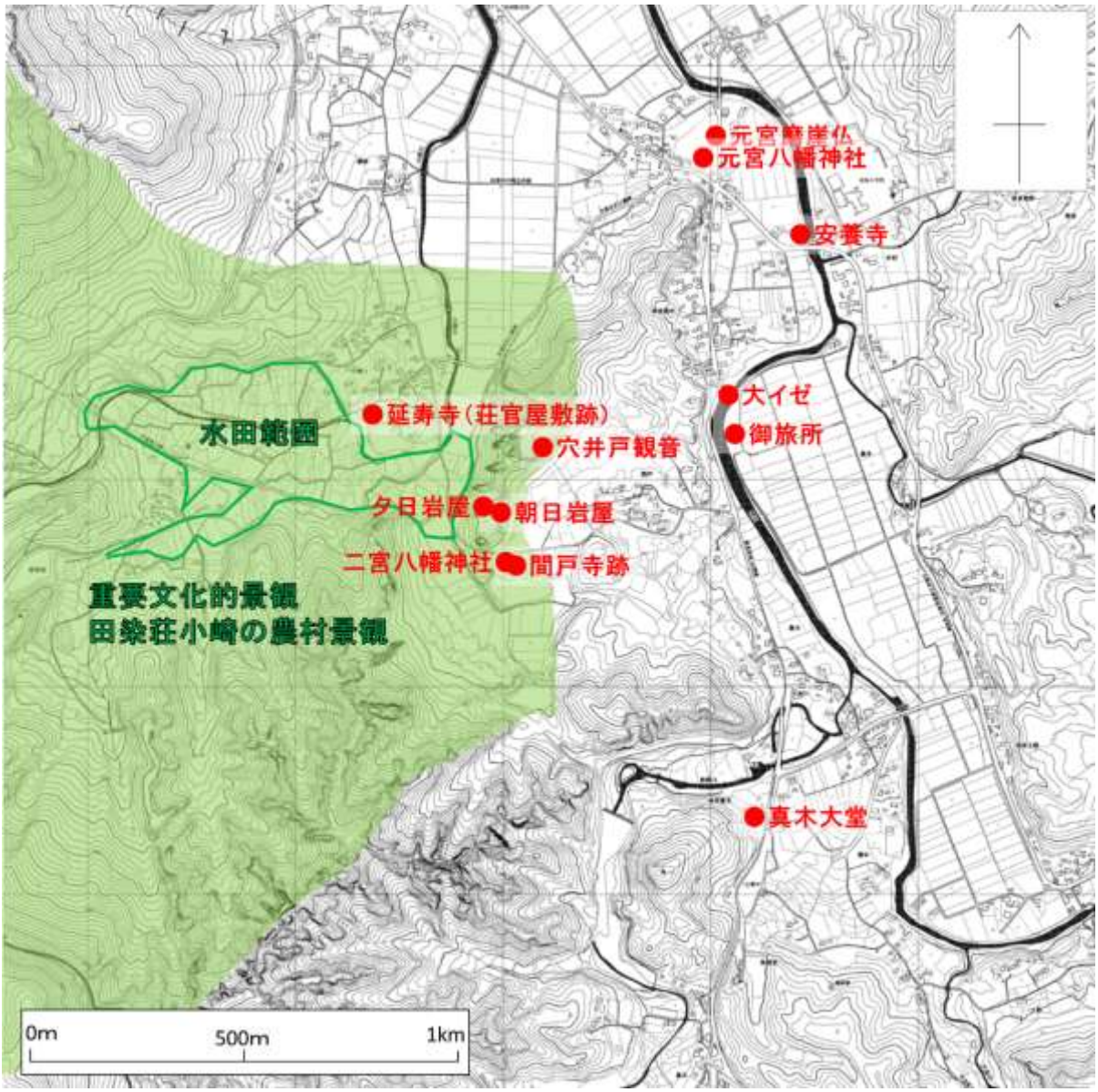


図６：夕日岩屋・朝日岩屋　周辺の要素の位置図

●延寿寺：田染荘の荘官屋敷跡（尾崎屋敷）に比定される。近世以降は浄土真宗の寺院となっており、夕日岩屋から台薗集落を見下ろすと本堂がひときわ目立つ。

●二宮八幡神社：間戸村の鎮守であり、元宮八幡神社・三宮八幡神社とあわせて田染三社と呼ばれる。秋の三社祭りの御旅所も地図に記載している。

●間戸寺跡：中世に間戸村にあったとされる寺院。現在は石造二層塔が残されている。

●穴井戸観音：深い洞窟状の岩屋の霊場。洞窟内の観音菩薩は常に濡れているとされて農耕の信仰と関係し、仁聞の隠れ水と呼ばれる霊水を飲めば知恵がつくとされる。

●大イゼ：田染池部の旧条里エリアを灌漑するためにつくられた大型の井堰。

●安養寺：田染八景図（正井和行作）が安置される寺院。

●元宮八幡神社：田染三社のひとつ。南北朝時代に元宮磨崖仏を依代に八幡神を勧進し、その後、二宮八幡神社と三宮八幡神社を分祀したと縁起に伝わる。

●真木大堂：夕日岩屋・朝日岩屋の本寺であった馬城山（喜久山）が前身だったとされる。重要文化財に指定される大型の仏像群が残されている。

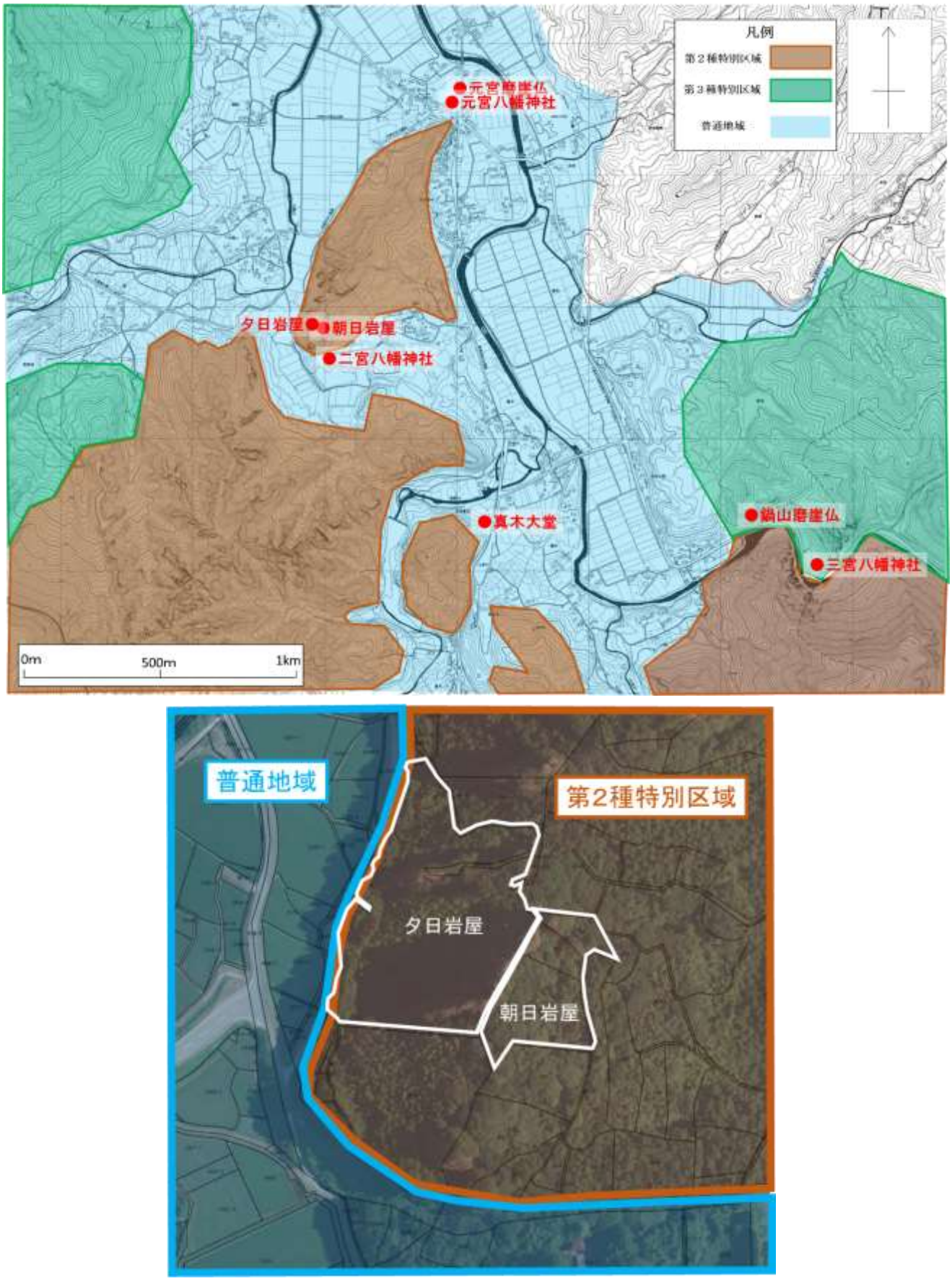


図７：国東半島県立自然公園の規制の範囲

■夕日岩屋に関する図版

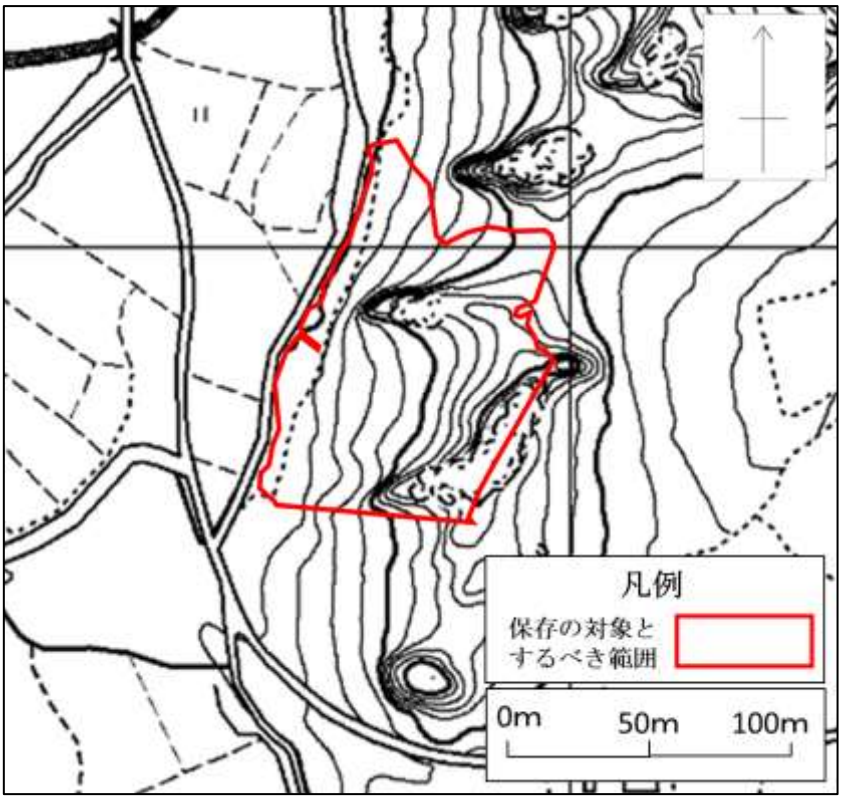


図８：夕日岩屋　範囲図（地形図）

※地形図に表示される境界などは必ずしも正確ではない。

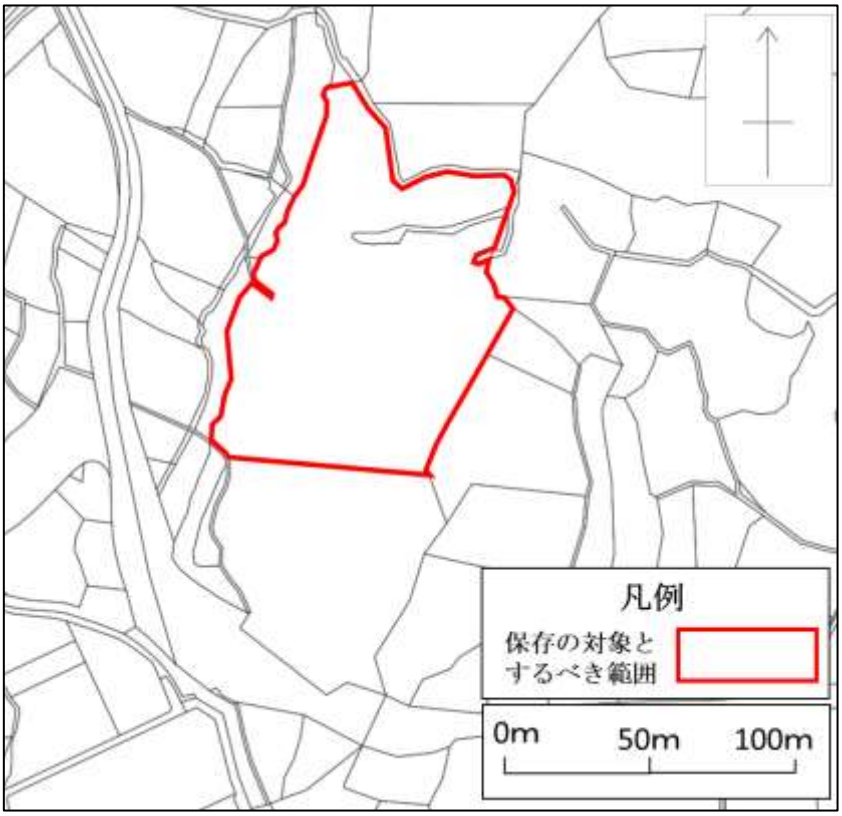


図９：夕日岩屋　範囲図（公図）

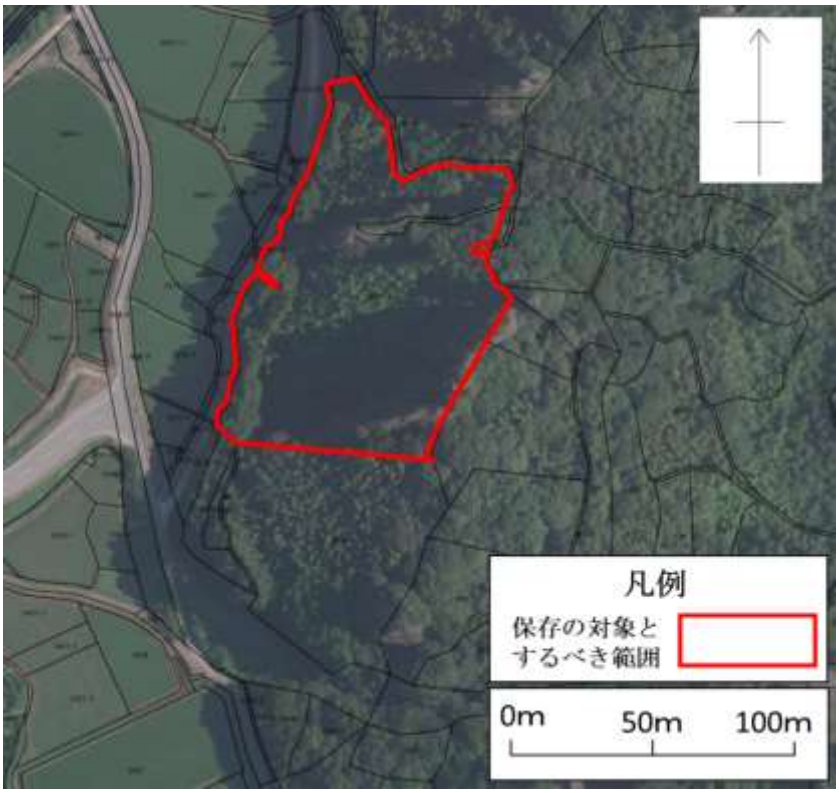


図 10：夕日岩屋　範囲図（航空写真）

図 11：田染小崎から見た間戸ン岩中の岩の名称

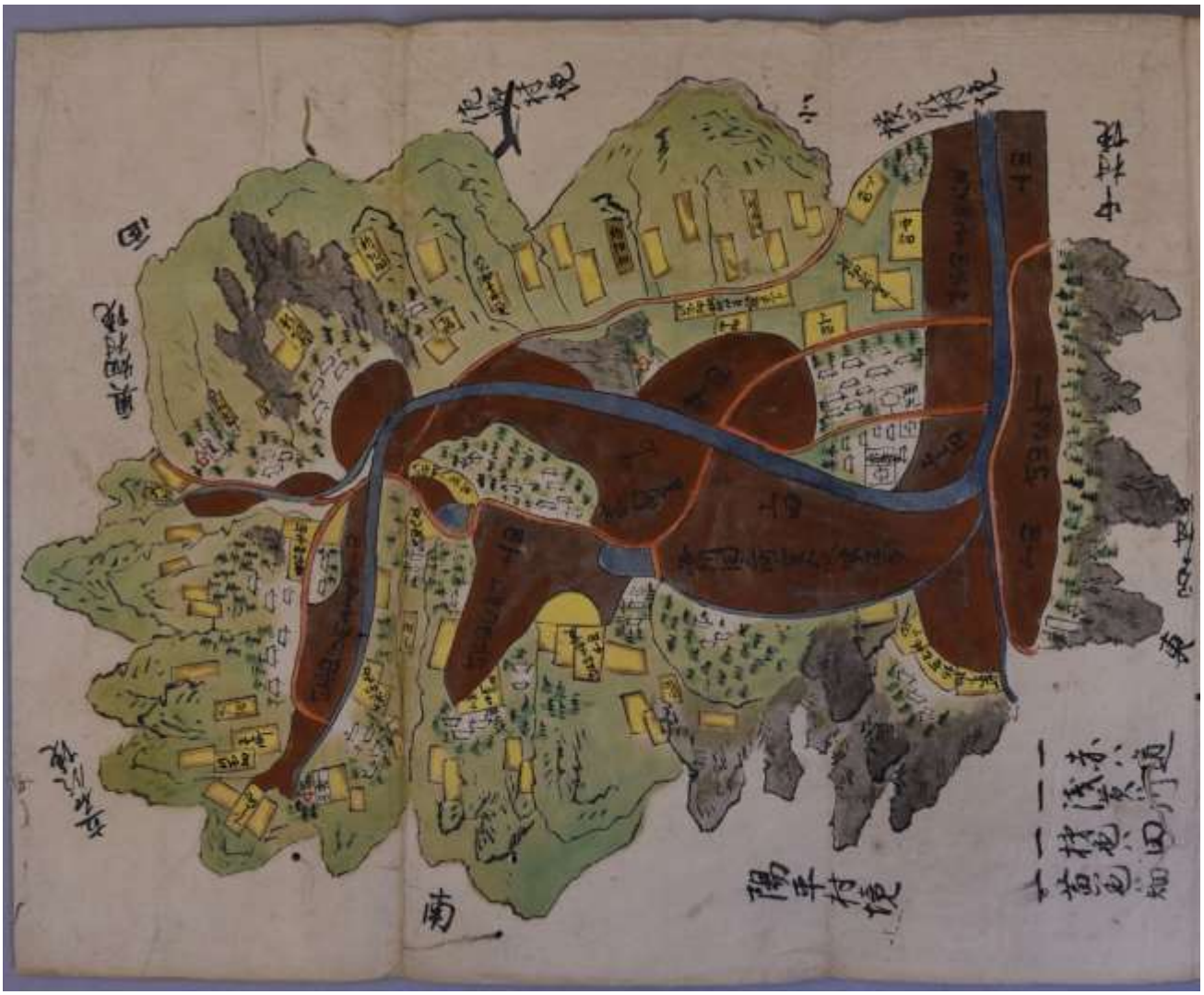


図 12：島原藩領田染組村絵図（小崎村）　※上が北

間戸ン岩の部分拡大

図 13：田染八景図（安養寺蔵：正井和行作）

■朝日岩屋に関する図版

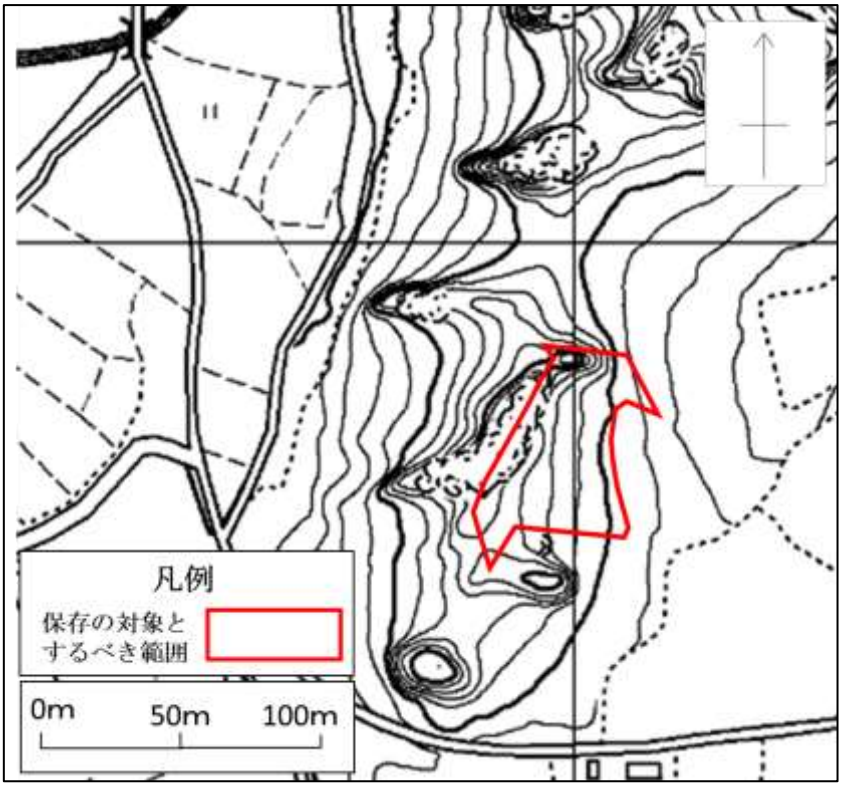


図 14：朝日岩屋　範囲図（地形図）

※地形図に表示される境界などは必ずしも正確ではない。

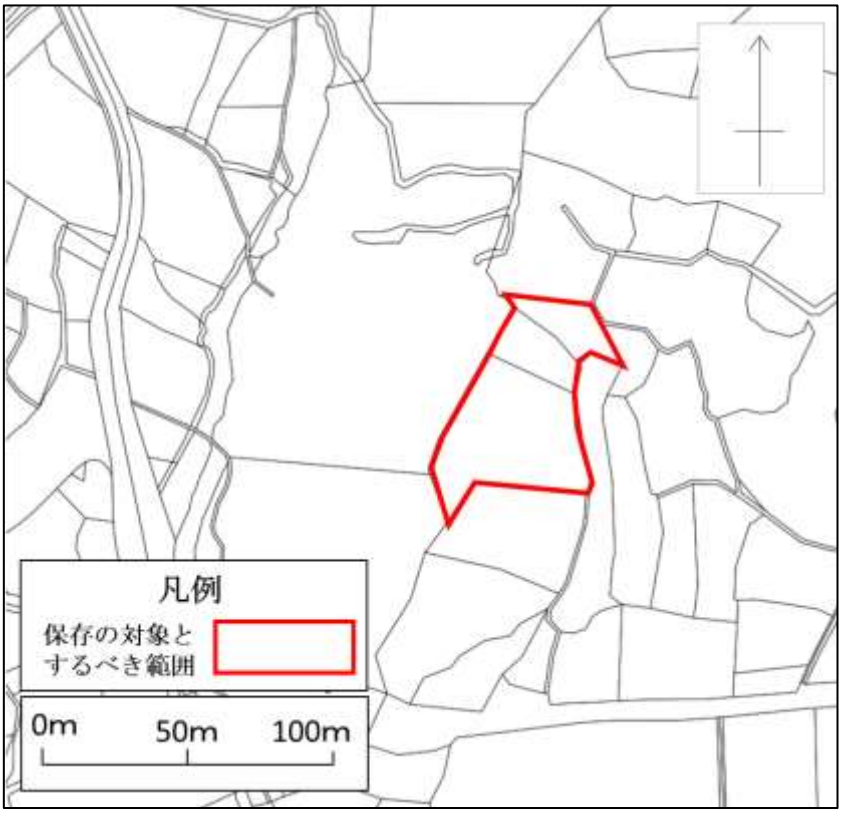


図 15：朝日岩屋　範囲図（公図）

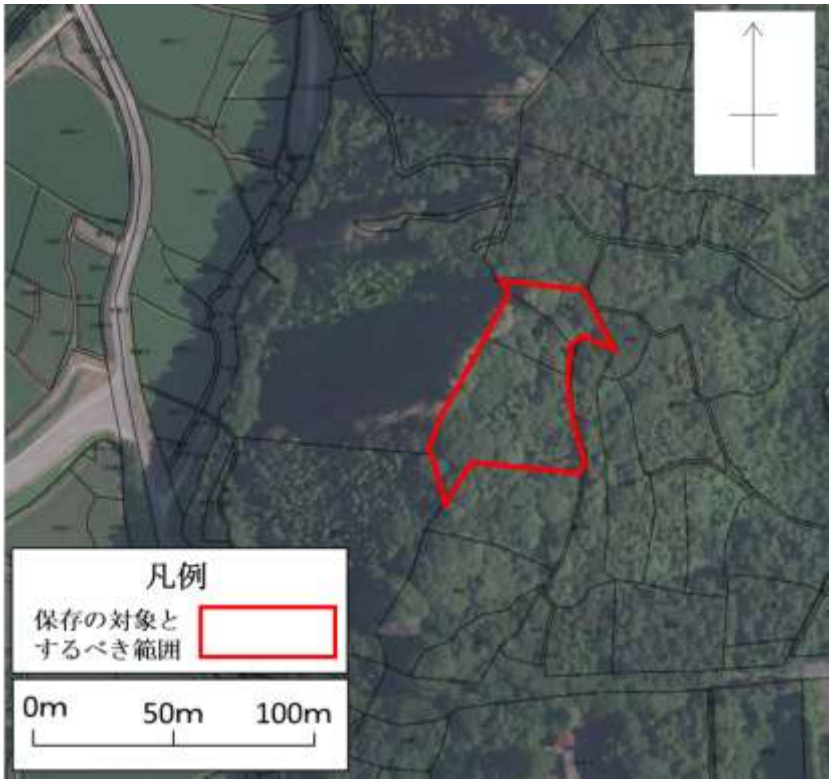


図 16：朝日岩屋　範囲図（航空写真）

図 17：島原藩領田染組村絵図（間戸村）　※上が北

２つ描かれる岩屋（白丸）の内、左が夕日岩屋・右が穴井戸観音

図 18：間戸集落から見た間戸ン岩中の岩の名称

【夕日岩屋・朝日岩屋に関する文献等】

■「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案」(『永弘文書』) 建武４年(1337)

(『豊後国荘園公領史料集成２　来縄郷』より)

六郷山本中末次第幷末寺四至以下記之、

本山付末寺

一、後山　吉水山　大折山　鞍懸山　津波戸山　高山　馬城山

一、後山　払□料田畠山野等四至以下、院主相伝之証文爾明白也、當寺領〈今者宇佐／大宮司押領、〉

(中略)

一、高山　払々料田畠山野等四至以下、院主相伝証文爾明白也、當寺領薫石以下払門少々〈河野四郎／押領〉

一、馬城山〈限東赤岩辻　限西ハヱホシ嶽／限南六太郎美尾　限北光廣〉

委院主所持証文爾明白也、但近年〈曽根崎／十郎押領〉

(中略)

本山末寺

辻小野山　大谷寺　間戸寺　伊多伊　大日岩屋　中津尾岩屋　轆轤岩屋　良醫岩屋　朝日岩屋

夕日岩屋　聞山岩屋　今熊野岩屋　稲積岩屋　日野岩屋　鳥目岩屋　河邊岩屋　鼻津岩屋

普賢岩屋　如覚寺　来迎寺　光明寺

一、□瀧寺〈限東迫　限西マイ淵／限南サクラノ尾立　北山下美尾〉

(中略)

一、良醫岩屋　朝日岩屋　夕日岩屋　聞山岩屋　稲積岩屋　日野岩屋　鳥目岩屋〈馬城山末寺也〉、彼寺領多分〈曽根崎十郎入道押領〉、寺領四至堺、本寺院主所持証文仁分明也、

(後略)

■『西国東郡誌』田染八景の項(西国東郡編『西国東郡誌』(大正 12 年)、193 頁)

田染郷は旧時広大の境域を有し、山谷の奇勝に富み、絶景の名区多し。今北方河内村境より、東田原村界に至るの間、泉石絶佳の境鮮しとせず。嘗て十市石谷此に遊び、八景を選擢して其画図を作り、前年井上圓了博士之れに詩を題すと云ふ。八勝の名、乃ち左の如し

叡峯曙雪　池部群鷺　桑川蛍火　本宮晴嵐　間戸山月　大堂晩鐘　熊野櫻花　鍋山啼猿

■『田染村志』田染耶馬の項(田染村編『田染村志』(昭和 7 年)、189 頁)

天斧鬼鑿、鴻荒の世、一夜揮ひて、田染闔郷の奇嶽怪石を剗刻し来る。所謂田染耶馬なり。而して其の趣態は寧ろ豊前の本耶馬に勝る。科学的に謂へば、火成岩に對する風化水蝕作用なり。勝域汎きに彌る。大別して、熊野耶馬、鍋山耶馬、間戸耶馬の三となすを得べし。

(中略)

間戸耶馬　烏帽子嶽の餘脈伸びて、陽平を経、下村の平地に突出するもの、即ち間戸耶馬なり。此處にも風化水蝕作用最も巧妙に行はれ、所在洞窟多し。就中朝日岩屋、夕日岩屋、穴井戸等最も現はる。俗諺戯謔して曰く田染には十八間の窓〈間戸、窓国音相通ず。〉ありと、亦佳謔とすべし。背面小崎道路より観

るに、孤松を戴ける岩石の趣態凡ならず。寧ろ深耶馬の勝に軼ぐるを覚ゆ。此の一帯凡て佛蹟の集團地なり。

■『田染村志』田染八景の項（田染村編『田染村志』（昭和７年）、190 頁）

杵築の画伯十市王洋（或は云ふ其の父石谷なりと）嘗つて田染に游び、支那瀟湘八景乃至我が邦の近江八景に倣ひて、田染八景を撰び、其の図を画きたるに始まると云ふ。杵築の儒員島徳世亦八景の詩を作る。後年井上甫水博士（圓了）亦斯の地に遊び、八景に詩を題す。博士乃鍋山の為に、佳字を撰びて南屏山と曰ふ。八景左の如し。但し池部群鷺は、近年耕地整理、排水を施行したる為め、其の実を失ふに至れり。

叡峰曙雪　池部群鷺　桑川蛍火　本宮晴嵐　間戸山月　大堂晩鐘　熊岳櫻花　鍋山啼猿

■『田染村志』朝日夕日の観音の項（田染村編『田染村志』（昭和７年）、190 頁）

間戸の奇峰、蜿蜒として連る處、最も峭絶なるものを霊鷲巌となす。村社二宮社の西方に在り。巌頭亂松を戴き頗る佳嘱とす。巌の表裏両面相背いて自然龕をなし、安置するに観音菩薩を以てす。稱して朝日観音竝びに夕日観音と曰ふ。朝暉夕陰、氣象萬千するの際、観音の影像を現するを以て斯の名ありと謂ひ、古來人口に膾炙せる靈域なり。龕像は所謂高山寺の燒佛なり。仲秋の夜、殊に月を賞するに佳く、田染八景中、間戸の山月亦夙に世に喧傳せらる。

■『田染村志』郷土詞藻・田染八景の項（田染村編『田染村志』（昭和７年）、231 頁）

第一節　田染八景

桑川蛍火

桑川雨後緑初肥　両岸垂楊覆釣磯　日暮丹蛍偏得意　東西南北自由飛

池部群鷺

平田水漲碧於油　吟歩村辺満目秋　白鷺幾群来作伴　知他閑意與人侔

大堂晩鐘

千古大堂伝大名　人言養老此経営　晩鐘響處斜陽淡　両々三々暮鳥鳴

間戸山月

間戸由来翠色濃　幽林怪石路重々　於中勝景君知否　月上巉巌百尺松

本宮晴嵐

一條細路渡橋長　巌岳宮臺気鬱蒼　吟歩已知塵垢盡　晴嵐如水滴衣装

鍋山猿聲

山間一路接渓長　行客争尋寂莫郷　誰識更深山静處　哀猿聲裡断人腸

熊野櫻花

路蟠青壁與雲隣　熊岳巍然知有神　最是東風三四月　櫻花映出満山春

西叡曙雪

山上曾聞有梵臺　即今唯見六花堆　紅暾遥照層巓雪　銀色中間曙色催

■夕日岩屋に関する写真

【現況写真】

写真１：夕日岩屋からの眺望（初夏）

写真２：夕日岩屋遠景

写真３：夕日岩屋からの眺望（夏）

写真４：夕日岩屋からの眺望（秋）

写真５：夕日岩屋

写真６：夕日岩屋の仏像

写真７：針の耳

写真８：金毘羅・拝み岩

写真９：金毘羅　石祠

写真 10：峯道の手摺り設置状況

写真 11：間戸ン岩遠景（ドローン撮影）

写真 12：夕日岩屋遠景（ドローン撮影）

写真 13：夕日岩屋遠景（ドローン撮影）

写真 14：田染荘小崎の農村景観ライトアップ（千年のきらめき）

写真 15：月が昇る前の夕日岩屋
※針の耳から月の光が漏れている

写真 16：夕日岩屋より夕日を望む

写真 17：チャボツメレンゲ

写真 18：イブキシモツケ

写真 19：ブゼンノギク

【参考：登録区域外】

写真 20：夕日岩屋への登り口

写真 21：遊歩道

写真 22：銘酒「窓の月」の広告
※田染真中の旧渡邊酒造場で醸造されていた

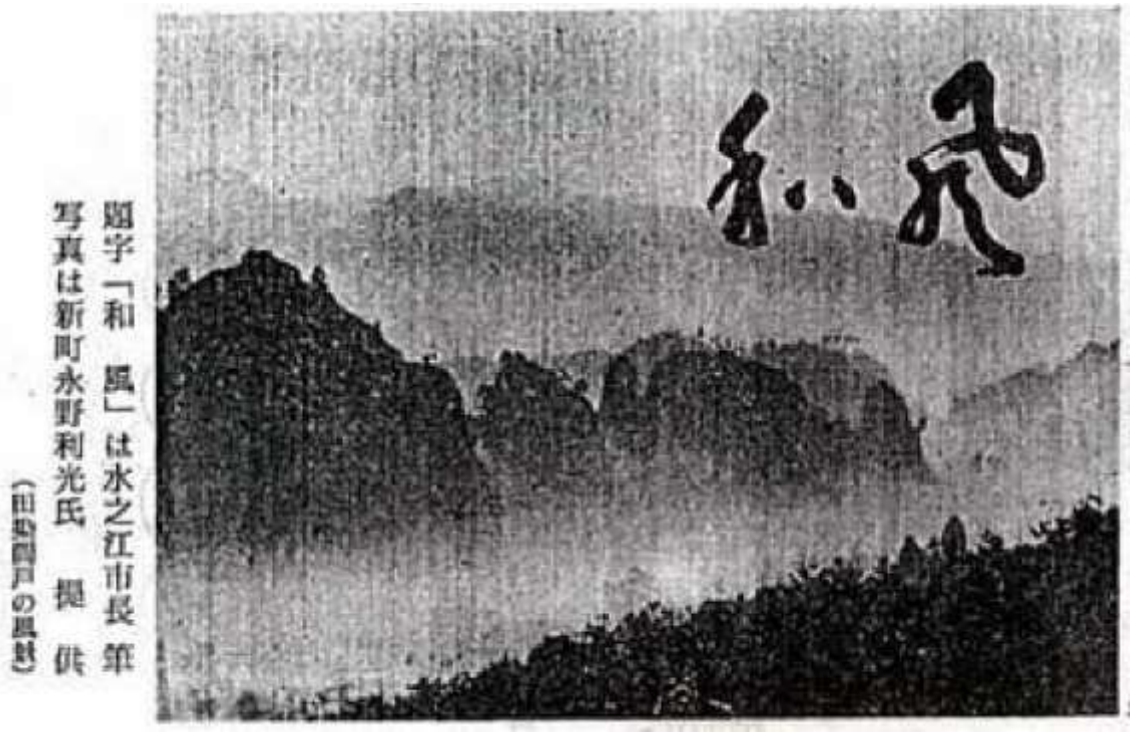
写真 23：復刻した「田染の夕 窓の月」

【古写真】

古写真１：田染八景の一部（『西国東郡誌』より）

古写真２：田染間戸岩の遠景（『西国東郡誌』より）

古写真３：同夕日觀音の岩（小崎より望む）（『田染村志』より）



古写真４：田染間戸の風景（『市報ぶんごたかだ 昭和 45 年 1 月号』より）

■朝日岩屋の写真

【現状写真】

写真 24：朝日岩屋

写真 25：朝日岩屋遠景（ドローン撮影）

写真 26：朝日岩屋

写真 27：朝日岩屋　木彫仏残欠

写真 28：田染小崎から田染真中に抜ける道

写真 29：朝日岩屋付近から朝日を望む

写真 30：イワヒバ

【参考：登録区外】

写真 31：二宮八幡神社

写真 32：穴井戸観音

写真 33：穴井戸観音（洞窟内部）

写真 34：間戸二層塔（間戸寺跡）

【古写真】

古写真５：間戸の朝日岩（『田染村志』より）

夕日岩屋・朝日岩屋　名勝調査報告書

発行日：令和　５年　７月　７日
発行者：豊後高田市教育委員会
〒872-1101
大分県豊後高田市中真玉 2144-12
TEL:0978-53-5112